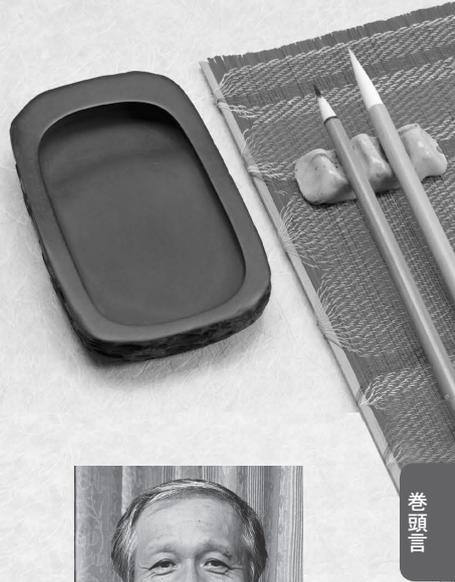


# 化学教育 徒然草



## 博士の教育



MIYAMURA Kazuo

宮村 一夫

東京理科大学理学部化学科 教授  
理事・化学遺産委員会委員長

まずは米国の大学教授から聞いた小嘶から。

日本の高名な学者からの推薦で、博士研究員を採用した。現れた若者は自己紹介の後、こう言った。“Boss, I am ready. What should I do? (準備は万端だ。さあ、何をすればいい?)”

現在の学術の世界では、博士の学位を取得した後、さらに希望する研究を続けるために任期付きの博士研究員、通称ポスドクとして、その研究が可能な国内外の研究機関で研究を継続するのが一般的だ。学部4年、修士2年、博士3年の標準的な課程を修了し、その間に得た研究成果を博士論文にまとめ、defenseと称する大学教授5人ほどによる審査を経て合格と認定されれば博士の学位が授与される。長い期間のように見えるかもしれない。しかし、新奇現象を発見したり、あるいは未開拓の研究対象を見つけて実験したりする傍ら、増え続ける学術論文に目を通し、自ら学術論文を執筆・投稿して新しい学問領域を拓き、関連分野を含めて学問の世界を論じる実力を身につけるには、むしろ時間が足りないと感じる場合が多い。審査会の直前には、審査員から「あの論文は読んだか」と問われて立ち往生する自分の姿を想像し、うつ症状を示して精神に異常をきたす場合すらある。

でも心配はいらない。山男に「なぜ山に登るのか」と問えば、そこに山があるからと答えるだろう。博士を目指す者にとって研究とは、山男にとっての山だ。ふと実験データに異常を見つけ、文献を熟読し、実験を通して要因解明の糸口を探る。五里霧中、混沌の中から一筋の光明を見出し、霧が晴れていく。山頂から見る光景は格別だ。そんな経験を繰り返して研究者は成長する。教授退職を目前とする今でも、研究に没頭していた熱き日々が忘れられない。

博士に求められる提案力、洞察力、技術力、実行力を身につけるためには、日々の鍛錬が欠かせない。では、怠るとどうなるか。

小嘶の続き。実験機を与えられたこの博士研究員は、しばらく他の博士研究員の実験を手伝っていたが、ある日研究室を去っていった。ここにいても勉強にならないと言い残して。

[連絡先]

162-8601 東京都新宿区神楽坂1-3 (勤務先)